

『日本アジア研究』第16号（2019年3月）

## 奇跡のいのち ——あるハンセン病家族原告の語り——

福岡安則\*・黒坂愛衣\*\*

黒坂愛衣『ハンセン病家族たちの物語』（世織書房、2015）の出版がひとつの大きな梃子となって、2016年2月に熊本地裁に対して「ハンセン病家族集団訴訟」が提訴された。そして、2016年12月26日の第2回弁論のときに「原告番号188番」の女性が意見陳述をした。

「私は、昭和33年8月4日、宮古島にあるハンセン病療養所、宮古南静園で生まれました。（中略）実は、母は、私を妊娠していることが分かり、南静園の職員に墮胎させるための注射をうたれたのですが、その注射が失敗したおかげで、私は生まれることができました。」

その瞬間、この話、私たちは聞いたことがあると思った。宮古南静園からの退所者、知念正勝氏からの聞き取りでだ。知念氏からの聞き取りは、2008年2月19日、宮古南静園の面会人宿泊所「南楓荘」にて実施している（本誌本号に「隔離政策と優生政策と——あるハンセン病療養所退所者の聞き取り」と題して収録）。

この女性原告は、知念正勝氏の娘さん、Mさんであった。私たちは2017年5月4日～7日の日程で、原告団副団長の黄光男（ファン・グアンナム）氏を誘って宮古島へ。5月4日午後には園内フィールドワーク、夜は、宮古の家族原告の会「ティダの会」のみなさん、退所者、入所者のみなさんに集まってもらって懇親会（総勢25人）。翌日、ご自宅にてMさんから聞き取り。

「ハンセン病家族集団訴訟」における被告国の主張は“政府の隔離政策は、患者を対象としたもので、家族までも対象とするものではなかった。国の政策の被害が家族にまで及んだとは認められない”というものだ。国の代理人は、本気でそう考えているのだろうか。妊娠中に両親がハンセン病療養所から脱走することで命が守られ、いま、この裁判の原告となっている人と、私たちは何人も出会っている。そして、Mさんは、療養所内で妊娠中の母親が墮胎のための注射を打たれたが、幸いにも注射がはずれたために、命を拾った人だ。あきらかに国は“終生隔離絶滅政策”のなかで、患者たちのみならず、その子孫の抹殺をも企図していたのだ。ただ、それが完璧には遂行しえなかっただけなのだ。——とは言いつつも、その背後には、膨大な数の、墮胎によって抹殺された嬰兒の命がある。今回の家族訴訟でも“自分のきょうだいが墮胎された”と語る原告が何人もいる。

**キーワード：**ハンセン病家族訴訟、優生政策、ライフストーリー

\* ふくおか・やすのり、埼玉大学名誉教授、社会学

\*\* くらさか・あい、東北学院大学准教授、社会学

本稿は JSPS 科研費 25285145 の助成を受けた研究成果の一部である。なお、本研究の成果は著者自らの見解等に基づくものであり、所属研究機関、資金配分機関および国の見解等を反映するものではない。

## 水納島では「クンキャヌファ」といじめられた

自分の記憶があるというのは、高野部落からなのね。〔宮古島の熱帯〕植物園を越えて、水源地あたり。高野部落っていうのは移民部落で、琉球政府が建てた家並みがあって、大神島と水納島（みんなじま）からの人たちが〔集団〕移住したの。55年前〔の1962年〕かな。ちょっと詳しい日には覚えてないけど。自分の記憶はそこからスタートしてる。〔水納島の記憶は〕ない。ないというか、夢に出てきたら、あんな感じこんな感じだけど、ちゃんとした鮮明なのは覚えてない。海辺とか、そういうぐらい。なんか、おばあがいて、みたいな。何年前かに水納島に親子で行ったら、ああ、ここかなあ、と。

お父さんが言うには、〔私は〕4歳〔になる前〕に〔水納島から宮古本島〕来てる。南静園で生まれて、1歳ちょい過ぎて水納島に渡ったでしょ。そのときは、お父さんとお母さんと一緒に船に乗って、船酔いしてゲゲエしながら行ったって。で、お父さんのお母さん、おばあに預けられた。でも、その記憶はほとんどない。だから、1歳過ぎから〔の3年間〕、いちばん母親を必要とするその時期に、おばあとか、おじさん、おばさんのあいだで育ってる。上の2人がおばさん。〔そして、お父さんの弟の〕三男、四男、五男。

いちばん自分をおかわいがったおじさんが、四男かな。そのおじさんが学校から帰ってきたら、いつも、私が隣近所の子どもに石を投げられたりとか、いじめられてた〔って〕。おばあも、畑から帰ってきて、〔私が〕いじめられてるのを見て、抱き抱えて家に入ったとかいう話をしてた。そのおじさんも、やっぱり、やり返して〔くれた〕って。

「クンキャヌファ」みたいな感じでいじめられてて。「ファ」は子ども。〔だから“らい病の子”って悪口。〕けっきょく、高野部落に来て、そのメンバーは〔一緒に集団移住してきたから、あいかわらず私を〕いじめて。そのくらいから、だいたい自分の記憶としてはある。

〔水納島のときに、もう1回、両親が私に会いに〕行ってるんだ〔って〕。でも、その記憶はない。〔それと〕最近お母さんから聞いたんだけど、「あんたを連れて行ったときは、半月か1ヵ月ぐらいいいた」みたい。でも、村八分的になって、すごいきつかったって。〔両親が使った〕食器とか、消毒するの。竈の灰で洗ったりしてたよ、って。

水納島の記憶は、ほんとに、ない。だから、おじさんから聞いた話が主だね。おばあは、昔はあんなだったよ、こんなだったよ、っていうのは言わない。すごい我慢強い人だし、口数も少ないし。

〔私の生年月日？〕昭和33年の7月4日。58〔歳〕だね。誕生日がきたら、59になる。

## 集団移住の開拓部落での苦勞

〔集団移住で宮古本島の高野部落に〕おばあ〔たち〕と一緒にいったら、次男のおじさん夫婦は、もう結婚して所帯（せたい）をもって。ほんとにちっちゃい家（へや）なんだけど、そこに、おじさん夫婦でしょ。〔次男のおじさんは〕20代だね。〔あと〕高校生、中学生、小学生の、三男、四男、五男。おばあ。で、私。一戸建てで、竈のある台所。下土間。仏壇みたいなのあるところ。一番座、二番座があって、〔それが〕6畳二間ぐらいいかな。で、細長い裏座があって。だいたい、そこが夫婦の部屋になって。で、アイロンかけたりと

かするような〔部屋があつて〕。もうひとつ、部屋があつたのかな。そこに、いになんかはいたような気がする。——これ以外に、おばさんが2人いたけど、ひとり〔市内に〕いて、もうひとは学校に行つてたのかな。

〔高野部落は〕開墾の時期だから、すごい大変だった。貧しいし、食べるものもないし。おじさんたちは、学校が終わつてとか、休みの日には、畑にいるイメージしかない。私は幼稚園でしょ。おじさんの上の子は生まれてたから、けっこう、お守りして。おっばいの時間とかには、畑に〔おぶつて〕行って、おばさんに〔乳を〕飲ませてもらつて。あと、薪取りに、自分も一緒に付いていった記憶がある。ほんとに自給自足。すごい生活レベル、低いんだもの。草履も靴もなかった。サバ〔つていう〕ゴム草履を雨の日も風の日も〔履いてた〕。

〔高野部落では〕共同の水飲み場だった。そこから水を汲んできて、水瓶に入れる。自分なんかの家は、ちょっと高台だったわけ。だから、小さい自分にはきつくて。何年かしたら、水道が各家庭に引かれた。電気もないから、ランプ。自分の手がちっちゃいから、ランプ（それ）を拭くのをやつてたような記憶がある。生活的には、貧しい時代だから、食べるものもない。ソーメンと、海から獲つてきた魚。あと、お芋。甘いものといつたら、黒糖。黒糖もちゃんとした黒糖じゃなくて、〔ただ煮詰めただけの〕餡みみたいな、変なのがあるわけさ。それを、遠足のときに、おばあがつくつてくれたのを覚えてる。

〔高野部落へ移つてからも、いじめられてた。水納島から一緒に移つてきた〕同級生が何名かいて。パシリのなことつていうか。〔それと〕なんかあつたら、ちょっとはじかれる。「〔来なくて〕いい、あんたは」。で、学校から家までの距離というのが1時間〔弱〕。そのあいだは、仲良く遊んでるときもあるけど、ある日突然、いじめられる。カバンとか、「持つてえ」とか。で、みんな、おなかすいてるから、帰りに畑で盗んで食べるが多かつたわけ。「盗んで来い」とか。で、捕まるのは自分、みたいな。そのいじめてたボスのな子は、大柄の女の子だったのさ。きょうだいでいじめたね。そのお兄ちゃんも意地悪だった。

〔なんでいじめられてたのかつていうのは〕自分の記憶のなかではないけど。四男のおじさんに言い聞かされてたのは、「その〔両親がハンセン病だった〕ことで、いじめられてたんだよ」つて。もう亡くなつてるおじさん。大阪にずうつと行って〔ただけけど〕。大阪つて、やっぱり、沖縄の人が多からさ。その下〔の五男のおじさん〕も亡くなつてるけど、もうひとりの上の〔三男の〕おじさんが〔いまも〕大阪にいる。高校を卒業して集団就職で行つてる年代。そのおじさん、ほとんど帰つてこない。盆とか正月に、何年かにいっぺんしか帰つてこない。

### 南静園の両親の部屋が“わが家”

〔自分の親がハンセン病だつて〕いつごろから気づいたのかな。やっぱり、南静園に行くようになってから〔だね〕。高野部落へ移民してきて、たぶん会いに行つてると思うわけさ。4歳の誕生日も南静園（あそこ）でやつて、写真を撮つてくれるのは覚えてる。色が黒いのにな、真っ白なオモチャのパラソルとき、真っ白いドレスなの。めっちゃ、似合わない。その写真があるの。でも、やっぱり、親恋しさつていうのは、すごい強かつたから、楽しいのは南静園（そこ）だけ。南静園だけが天国。でも、高野部落に戻れば、現実が厳しいじゃん。だつて、食べたいときに食べれないし。子どもつてさ、食べることだけさ、楽

しみって。

〔自分の意識のなかでは〕いつのまにか〔両親は南静園に〕いたね。あすこにいる。〔でも〕タブーみたいなどこあるじゃん。なんか、聞いちゃいけないみたいな。〔でも〕徐々に徐々にわかっていったと思う、一緒にいながら。だって、あそこへ行ったら、指が曲がってる人も、顔が崩れている人〔もいて〕。そのなかで育っているから、あんまり違和感ないっていったら変だけど。だけど、あすこに共同シャワー室があったんだけど、自分が入るときだけは、お母さんがそこだけちゃんと〔きれいに〕してから、「ほかのそこは触るな」って、すっごい神経質になってたのは覚えてる。

話はちょっと飛ぶけど、むかし、「らい予防協会」って行って、スキנקリニックがあったんだけど、そこにも定期的に連れて行かれた。ちょっと湿疹が出たりとか、シラクモとかそういうのが出たら、すぐ先生に診せたりとか。〔親は〕ものすごく神経質になってたんだって。自分は、でも、それは親に触られるからうれしいわけ。なんか、遊びみたいな感覚で。南静園なんか行っても、園長先生だったか誰かわかんないけど、診てもらった記憶がある。〔それは〕小学校の、〔親と〕一緒に住む3年までのあいだ〔だね〕。でも、一緒に住むようになってからでも、やっぱり、定期的に診てもらった記憶がある。〔そんなこともあって〕自分の親がそうだっていうことは、徐々にわかってきた。

高野部落でも、たまぁに親が〔私に会いに〕来るさあね。したら、隣近所のおばさんたちとやりとりをするわけね。「Mちゃんかわいいねえ」とか、社交辞令的な大人の会話してるじゃん。してるけど、親がいなくなったら、目線は違う。というのだけは覚えてる。親の前では、あんなに“やさしいおばさん”だったのに、いなくなると、こんなに態度が変わる、っていうのは、やっぱり、自分の親は嫌われるような、なんかアレなんだと。それで、なんか〔自分は〕“いい子”にしていなきやいけないみたいなどころもあった。

〔次男のおじさん夫婦にも〕自分のなかでは、あんまりやさしくされた記憶はない。そのなかで、おばあは、私を庇う。おじさん夫婦とのあいだで、たぶん、おばあもきつかったと思う、いま考えると。〔ほかの〕おじさんなんかは、かわいがってはくれるけど、忙しいっていうのがあって、そんなにかまっていられないというか。

〔高野部落から南静園まで〕歩いて、約2時間。〔最初のころは〕おばあと一緒。いまは道路がきれいになっているけど、〔当時は〕ノウサ道って行って、白い道。石灰を砕いたようなやつ〔を撒いてあるわけ〕。雨が降ると、土とそのノウサがぐちゃぐちゃになって。あのときは馬車だから〔馬の糞も一緒になって〕。〔そういう道を〕おばあとふたりで歩いて。でも、きついからね、途中でおんぶしてもらうとか。途中で、桑の実とかグミとかあるんだけど、そういうのを摘まみながら。

〔南静園に行って〕泊まり始めたっていうのは、たぶん、学校にあがってからだと思う。夏休みは1ヵ月いたと思う。そこで夏休みの宿題もする。ほんとに、そのときだけが、自分の幸せ。親に甘えられるし。

〔お父さんお母さんがいた夫婦舎は〕4 畳半と台所。お父さんとお母さんのところが、やっぱり、自分にとっては家。我が儘できるし。夫婦棟だったから、似たような境遇の人たち〔がいて〕、その女の子といつも遊んでた。5つぐらい下かな。野原〔忠雄〕さんとこの子どもとかも、一緒に遊んだ。8つぐらい

下かな。

〔ほかの子たちも、やっぱり、園のなかで〕生まれてる。で、おんなしように、おじさん方とかおばさん方とかに預けられてた。〔伊良部島の〕子だったけど、小学校高学年くらい〔になったら〕、宮古島（ここ）に来て、間借りしてたわけ。いまみたいにアパートもないから、一軒家の片隅を間借りして。その女の子とは、小学校は一緒に出た記憶がある。いまでも、たまに連絡があつて、何年かにいっぺんぐらい〔会う〕。なにも話さなくても、気持ちが安心できる。やっぱり、ほら、おんなしような境遇で、おなし時期に、あそこで過ごしてるからさ。

### おばさん宅に移る

高野部落（ここ）には、小学校1年の1学期までいて。夏休みは園にいて。あとから聞いた話だけど、ちょっと、お父さんとおじさんが喧嘩して。たぶん、うちのこと。で、「出ていけ」って〔なつて〕。それで、〔1年の2学期からは〕お父さんのすぐ下のおばさんのおうちに、私、移ったわけさ。おばあとふたりで。

そのおばさん夫婦、子どもが5名だけど。そのときにはまだ2人ぐらいしかいなかったかな。おじさんは〔本土へ〕季節工へ行つてた。あのときは、もうほんとに仕事がないから、季節工で稼いで。だから、年に1回か2回ぐらいしか帰つてこなかったような記憶がある。おばさんは、市場で洋服を売る仕事をやって。で、おばあが、だいたい家のことをやって。でも、あのころ保育園というのができたころで、その送り迎えとかも自分がやつたりとか。

〔当時の私の性格？〕勉強は、頑張らなかつた。ただ、家のことはやらんといけないというのがあつて。おばあもやっているから。

おばさんどこにいたときは、台風の大変さの記憶がある。一軒家で、大家さんが半分〔に住んで〕いて、半分からこっちをうちらが間借りしてたわけ。おっきい台風がきて、戸がみんな飛ばされて。で、大家さんのところに避難したんだけど。そこ、みんなで戸を押さえて、という記憶がある。あのころは、台風の被害〔があると、支援〕物資があつたわけ。だけど、〔せっかくもらった〕靴が入らないとかさ。ノートとか鉛筆なんかももらった記憶がある。

〔高野部落から市内に移つたら、いじめられるのはなくなった。〕それがいちばん、自分としてはうれしい。学校へ行つても、知ってる人、いないさあ。いないから、“知念の娘”とかつて、そんなのも全然ないし、新しく心機一転という感じで。

そのあたり、嫌な思い〔全然〕なかつたかといつたら……。〔近所に〕すごくやさしくしてくれた中学生くらいのお姉さんがいたわけ。学校から帰ってきたら、いつも、そこに行つて遊んでたわけさ。そしたら、ある日、そのお姉さんの家族、おばさんかだれかが、自分の親の悪口、「南静園（あっち）の子どもらしいよ」とかつていうのをしゃべっているのを聞いて、それからもう、行けなくなった。ああ、ばれちゃった、みたいな感じで。やっぱり、そのあと、そのねえねえは、もう、前みたいに、「Mちゃん、おいで、おいで。お菓子あげるからさ」とつていうのをしなくなつて、もう疎遠になつた。

### 南静園で過ごす時間

〔南静園に行ってるとき、職員の方は気になったか、ですって?〕職員の方って言うのは、ほとんどなくて。〔ふつうの〕職員って、あんまり〔園内を見て〕まわらない。逆に、「歯が痛い」つったら、歯をみてくれてたよ。〔入所者の子どもが遊びにきてると言うのは〕ほんとうはダメさ。ダメだけど、暗黙の了解で、たぶん、オッケーだったんじゃないか。

〔怖いのは〕見張りのおじさん。監視員が2人いて。ひとりのおじさんはやさしいおじさんで、ひとりのおじさんは怖いおじさんで。やさしいおじさんのときは、おおっぴらで、走り回ってたけど。怖いおじさんのときは、「あっち行ったから、こっちで遊ぼう」とかさ、隠れながら遊んでいたわけ。

〔泊まるのも〕ほんとはダメ。〔だけど、親子〕3人で、蚊帳を吊って〔寝てた〕。あのころは、なんていうの、〔監視が〕緩くなっていたんじゃないかなあと思う。それでも、たまあに、南静園に車で行くときに……。ラッキーなことに、だれかが行くよとなったときに、便乗して行く。あそこに検問みたいなのところがあったわけ。そこで止められる。だから、〔私は〕座席の下に入ったりトランクのなかに入ったり。

それ以外に園に入る方法は、けもの道じゃないんだけど、水飲み場があったでしょ、水タンク。あそこ、道かなにかわからない道があったわけ。自分なんか、いつも、おばあさんとふたりで、畑のなかを歩いて〔その道伝いに行ったわけ〕。自分の親は、いま医局の〔あるあたりに〕いっぱい棟が並んで。〔一棟に〕だいたい5夫婦〔ずついて〕。その真ん中あたりにシャワー室があったりとか。で、〔こっちに〕自治会事務所。〔そっちに〕学校〔が〕あつて。大きいグラウンドもあつて、〔みんなが〕野球やったりとか。公会堂では〔私も〕映画を見た。そこで私が初めて観た映画が、怖い猫の映画だった。なんか、化け猫のシリーズが流行ってて。

児童寮は、いま管理棟になっている〔あたり〕。すごい親しくなった子どもたちもいる。で、お母さんはいつも怒って。「あんまり行くなよお」って。「昼寝も一緒にしたらダメ」とかさ。なんか、あんまり、くつつくな、みたいなこと、よく言われてた。でも、それでもやっぱり、自分の年代〔の友達がほしかつたから〕、「〔私も〕こっち〔の学校〕に来たい」って、何回も〔親に〕言った。〔でも〕「ダメ」って。

〔南静園にいるときの食事はどうしたのか、ですって?〕両親のいた部屋は〕1DKみたいな感じの、もう、普通のおうち。ちゃんとした台所もある。あのときは、畑もあつて、みんな自給自足。米とかは配給だったと思う。しかも、みんな元気なおじさんなんかだから、海に行つて魚はとってくるし。配給品がけっこう缶詰が多くて、アメリカさんからの物もあつたよね。だから、風邪ひいたら、ミカンの缶詰とかかさ、桃の缶詰とかかさ。

おじさんおばさんのところでは、〔台所に〕籠が〔吊つて〕あるさ。冷蔵庫がないから、お芋とかはそこに置いて、腐らないようにしてあるわけ。風通しよくして。〔私は手が〕届かないわけさ。だから、棒をもってきて、こうやって蓋を開けて、芋(これ)を取つた。この蓋をきれいに閉め〔ようとす〕るんだけど、きれいに閉まらなくて、いつもぼれて。だから、食べることに必死だった。親がハンセン病だから、ちっさいときはいじめられたって、それはあつたんだけど、〔それよりも〕食べることに關して、すごい、やっぱり、食べたい、食べたいだからさ。学校から帰つてきても、おなかすいてるし。それが十分に与

えられないという、そのつらさのほうが大きかった。南静園に行ったら、おじさんおばさん、周り近所の。「Mちゃん、Mちゃん。これ食べれ、なに食べれ」って、お菓子とかくれるさ。もうほんと、天と地の違い。

〔南静園では、自分と同じような境遇の友達が〕まわりに4,5名ぐらいいた。南静園（そこ）で会うでしょ。すれ違うさ、学校とかでも。お互い知らんぷり。なんか、そこらへんはあったね。——会ったとき、自分が「あ、Kちゃんだあ」とか言って駆け寄ろうとしたとき、「あ、やばいよ」とかって言われて。そういうことで、覚えていったと思う。要するに、自分は否定〔される〕、ダメなんだみたいな〔自己認識は〕そこらへんから出てきたのかなと思う。

〔南静園が“子どものいない空間”という感じとは、ちょっと違う。〕だって、お正月とかお年玉もらいに行ってたもの、みんな。自分が生まれたときに、すごい抱っこしてくれたおばさん夫婦がいて、この人たち、子どもがいなかったんだけど、そこには必ず行く。親とおなし〔多良間諸島の〕出身だったかな。〔ほかにも〕何名か親しくしてる夫婦がいて、そこに行ったら、かわいがられる。顔を出さんと怒られるわけ。「なんで、あんた、来とったのに、このあいだは顔出さんかったかあ」とかって。もう必ず行くところは決まってる。

〔お母さんは宮古島の生まれ。〕戦争中の、昔の飛行場があったところ。〔父と母は〕3つ〔違い〕。お母さんが〔昭和〕12〔年生まれ〕で、お父さんが〔昭和〕9年〔生まれ〕。

### 小3から両親と一緒に暮らす

〔父の〕退所が〔小学校〕3年。お父さんが園から出てきて、〔一緒に〕生活しようというふうに〔なったわけ〕。なんていうの、〔おばさんの家で〕ちょっとトラブルとかあって、南静園までひとりでお父さんとお母さんに会いに行ってるわけさ。出たのは昼。着いたのが、もう夕暮れ時。その夕暮れ時の光景は、すごい覚える。

途中まではあんまり覚えてないんだけど、大浦（おうら）とか西辺（にしへ）ぐらいからは、いまでも覚える。すごい疲れてたと思うんだけど、車が来るたびに、道の下の畑におりて隠れた。見つかったちゃいけないと思ってるから。距離的には8キロぐらいかな。いまの宮古病院から南静園まで。小学校2年生の子どもにとっては、ちょっと遠い距離ではあるさ。途中、ナウサ道の、白い〔のが〕舞うさ。これが、すごい、口のなかにジャリジャリして。そういう変なことを覚える。正門から入れないから、いつもの畑道を通って。水飲み場のところに行ったら、ほかのおばさんが「あがあ、Mちゃん。大変、大変」みたいな感じで、駆け寄ってきたのを覚える。それで、お父さんなんかを呼びに行って〔くれて〕。お父さんはすごくショックだったみたいで、それをきっかけに〔園を出て〕きて。でも、お父さん、大変だったと思う。

〔どんなトラブルがあったのか、ですって？〕自分、小学校1年のときに〔親に〕勉強机を買ってもらってるわけ。買ってもらったちゅうか、〔南静園入園者の〕だれかに作らしたのを持ってきたと思う。そこに、大事な物、みんな入れてたんだけど。やっぱり、ちっちゃい子どもって、なんでも触りたいわけさ。で、欲しがるじゃん。でも、親からもらった物って、大事さ。トランプを、お父さんからもらってたわけ。南静園では、トランプ遊びとダイヤモンドゲームが流行っていて、〔私〕トランプはすごい得意だったわけ。〔おばさんの子ども

が] それを「貸して」って言ったとき、絶対渡さんかったわけさ。したら、おじさんが「そのくらい、貸してあげんかよ」って言って。それに対して私が、すごい意地張って、こんなして持ってたと思うわけ。それで、パツてさらって、投げ捨てられて。ばらまかれて。あとはちょっと、パシツてやられて。たぶん、それでそのまんま〔南静園へ〕行ったんだと思う。

そのお父さんの妹は、すごくやさしいおばさんで、いろいろやってくれていて。でも、やっぱり、自分の生活がほんとに大変な時期だから。自分の子どもも育てないといけない。〔そこに〕うちら2人、厄介者がいるでしょ、おばあさんと私。いま考えたら、大変だったろうなと思う。〔その出来事を親に話したか、だって?〕言ったか言わなかったかも記憶にない。〔ただ〕泣いてたような記憶がある。

それで、けっきょく、そのおばさんが新しく家を作ったから、裏座っていうか、3畳間2つ、細長くした部屋を借りて、そこに〔親子3人で〕住んだ。ほんとは、他の家を借りる予定で、その手付金も払ったんだけど、いざ引越すつったら、南静園の人というのがばれて、ダメになったという話をした。〔そして〕一緒に住み始めたときには、たぶん、お父さんだけが退所してて、お母さんは在籍してたと思う。だから、〔南静園に〕部屋があった。部屋はあって、1週間に何日かはいないといけないから〔ときどき南静園に〕帰っていたと思う。

〔裏座っていうのは〕いまは、老人ホームとかあるけど、昔は病気した人とか、年をとったおばあが、いわゆる寝たきりになってくると、そういう奥の部屋をあてがって、そこに寝るみたいな。ちょっとうる覚えだけど、昔、ハンセン病の人たちなんかも、そういうところの部屋に隠したりしたとか言ってた。

あ、〔お父さん、退所の手続きを〕しないで出てたはず。それはやっぱり、生活のためだったのかなあといまは思う。〔園での〕配給品が〔あるから〕それがおっきいわけ。生活、苦しかったんだと思う。〔そんなこと〕子どもって、わからんさあ、あほだから。お母さんも、何ができるわけじゃないじゃん。手に職があるわけでもないし。12歳のときに南静園に入って、それからずっと南静園で育ってるわけでしょ。青春から結婚までも。だから、〔外に出たら〕なにも仕事がないから、内職して。造る花。10コ単位で1円とかさ。〔そういう〕内職、根気強くやってたのは覚えてる。それを手伝ったのも覚えてる。でも、すぐ飽きるさ、子どもは。

〔両親と一緒に暮らし始めてからも〕夏休みのときは、南静園に行ってたよ。〔むこうにも部屋はあるし。あっちのほうが広いし。〕自由だし。〔行くのは、親子3人〕みんなで〔行った〕。そのころは、バスで行ってたかな。最近になって、お母さんは、ちよろちよろと昔のこと言うけど、〔以前は〕言わなかった。昔のこと話し合ったりとかは、あんまりなかった。とくに南静園のことは。たとえば、自分が学校のことを話すとか、そういう日常的事は話しかけるけど、昔ああだったよ、こうだったよというのは、お母さん、話したがない。自分が生まれたときに、どんな気持ちだったかあというの、ほんと、聞きたいけど、いまだに聞けない。

### 南静園の職員の子どもによるいじめ

〔小学校1年の2学期から転校して、いじめが終わったと思ってたけど〕そ



のあとに、南静園の職員の娘が同窓にいて、クラスがたまたま一緒になったわけ。したらもう、この子からいじめがあった。けっきょく、脅しじゃないんだけど、「あんたの母ちゃんがあっちにいること、バラスぞ」みたいなことになって、けっこう、いじめられて。小学校4年かな。けっこう陰湿なことを、いろいろされて。すごいきつかった。[そのいじめは] 1年 [続いた]。クラスが変わったら、もう、知らんぷりして、かかわらないようにした。自分の学校って [一学年] 11 クラスぐらいあって、すごいマンモス校だったわけよ。だから、小学校から高校までおんなし学校に通っているのに、名前も知らない人っていっぱいいるわけ。[クラスが] 離れると、部活かなにかで一緒にならないかぎり、かかわりが無い。

[いじめのことは、親には] だいたい大人になってから、「こういうことがあったよお」って、チラッと行ったけど。言えなかった、その当時は。園に会いに行ってたときも、いつも、「元気かあ?」「ご飯食べてるかあ?」とか、「友達と仲良くしてるかあ?」でしょ。そういうこと聞くさ、親って心配だから。「大丈夫だよお」「元気だよお」それしか言えないわけ。だから、そういう自分の、嫌なこととかって言うのは、言わなかった。大人になってから、チョロチョロと出したけどね。「あんなこともあったよお」と言ったけど。そのときは、心配かけたくないっていうか。親といるときは、楽しくしたいさ。もう、父ちゃん、母ちゃんとの時間を。そして、なんかね、お利口さんにしてないといけないみたいな [気持ち] がどっかにあって。[そうでないと] 余計いじめられる、みたいなのがあって。ただでさえも、ほら、そういう標的になったわけでしょう、ちっさいときなんかも。とにかく、いつもニコニコしているっていう、それだけだった。なんか、「いつも笑ってなさい」って [親に] 言われてたから。「ひとには、ちゃんと愛嬌して」とか。

自分って、教会に通ってたから、教会の教えもあって。「嘘をついてはいけない」とかさ、基本的なこと、人として当たり前のことをすごく言われて。「人を恨んじゃいけない」とか、そういうふうに言われて育ってる。日曜日は [教会の] 子供集会が朝の9時からだった。「天にまします我らの父よ、ねがわくは……」って賛美歌、歌ってた。「主の祈り」って歌。高野 [部落] にいる時期は、[教会には] おばあと一緒に行ってた。[けっこう距離] あるよ。途中で [熱帯] 植物園にパン屋があるから、そこで水をもらって飲んで。そして、帰りは、どっか食堂でそばを食べて帰る。ご褒美に。——おばあちゃんは、ずうっと、亡くなるまで、毎週欠かさず、教会へ行ってた。[うちはみんなクリスマスチャン。]

[転校してからも] 隠しているという意識は、どっかにあったと思う。やっぱり、キーワード式に、「南静園」とか「らい病」とかというのに対して、変にビクビクしてるところはあったと思う。しかも、隣近所のお姉さんにも、ああ、こんなふうにしてばれていくんだみたいなのがあって。あと、同級生のあの [南静園の職員の] 子のこともそうだし。

[でも] 隠してるっちゅうよりは、聞かれたら言う。あえて自分からは言わなかった [けど]、親しくなった友達にはしゃべってた。[しゃべったことで、離れていった子も] いたよ。でも、その子たち [自身] が [私のことを] 嫌あとかじゃなくて、親とかから「ダメ」みたいな感じで [言われて、けっきょく疎遠に] なったわけ。

〔そういうことがあると〕なんつうの、変に勘がよくなるわけ、そういうことに関しては。目つきなんかで、自分のことを好きとか、嫌われてるんだなってこととか〔がわかる〕。だって、いままで〔仲良く〕してた友達が、おんなし目つきじゃなくなるって、わかるさ。

〔試すというとおかしいけど〕ああ、この人だったら大丈夫かなと思って、話をしたこともあるよ。〔それで、うまくいってるケースも〕あるし。そうじゃなかったのも〔ある〕。大人になってきたら、やっぱり、おたがい大人だから、あからさまに拒否られたことはないけど。小学校高学年、中学生って、多感な時期だから。とくに中学生のときは、思春期じゃん。友達ができたら、うれしいし。なんでもしゃべる時期じゃん、友達と。でも、それがね、けっきょくは、成り立たなかったというのものもあるし。

### 父から「人間には美醜の観念がある」と教えられて

〔3 畳 2 つの家で暮らしていたとき、まわりの人は両親の病気のことを知らなかったのか、ですって?〕知ってる人は知ってるけど、知らない人は知らない。近所付き合いは、そんなになかった。近くにおんなじ多良間出身の人たちがいたけど、そこに 1 回顔出した〔ことがあった〕のは覚えてる。でも、隣近所の人とそんなに交流なかったと思う。あとは、教会の人たちとの繋がりとか親戚。ただ、大工仲間の人は知ってて、お父さんと呼んだと思う、「自分のとこで働け」って。しかも、うちのお父さん、あんなんだから、隠しようがない。あのひと、そこがすごいところだなと思うけど、堂々としてるわけ。自分もそれが当たり前と、ちいさいとき思ってたわけ。

だから、ちっと話、戻るけど、南静園に行ったときも、うちをかわいがってたあるおばあが、目も変になってるし、足もぜんぶ指がないし。それ、いつも、いじって遊んでた。なんか、そういうの、恐いとか気持ち悪いとかいうのがない。ちいさいときから、当たり前の感覚で。でも、それが、世の中では忌み嫌われるもんだというのを、徐々にわかっていったのが、小学校へ行ってからだと思う。自分、それがね、どっかで、心がゆがむような変な気分があったことを覚えてる。なんでえって。だから、自分が悪者みたいになるさあ。なんていうの、自分が普通じゃないみたいな感じ。そういう感覚を覚えた、小学校ぐらいのときかな。画像なんかでも、変な皮膚疾患のとかだったらさ、「ええっ、気持ち悪い」とか、みんな言うじゃん。たしかに、見た目に気持ち悪いけど、それと、自分なんか南静園で見てたおじさんおばさんなんか、たいして変わらんさ。自分の親も一緒さ。それに対する、なんか、嫌いな気持ちを覚えてる。なんつったらいいんだろう。〔そういうふう〕見る人たちに対して、そういうふうに見るわけえ、みたいなものもあるし。また、それに対してあんまり抵抗がない自分がおかしいのかなあみたいな。

お父さんと中学校のときに話し合ったときなんだけど、「ひとはね、美醜観念というのがあるからね」って。そのときに、その言葉を初めて知ったんだけど。「綺麗なものをあれして、汚いものを嫌う。それはしょうない」と。「だから、そういう人たちを責めちゃいけないよ」と言ったのを覚えてる。ああ、そうなんだあ、と。それが人間の当たり前ということで、いろいろ語り合ったことを覚えてる。そういうお父さんとの関係で、自分の気持ちっていうの、調整できてきたと思う。なにかあるたびに、お父さんからのアドバイスが、

けっこう大きかったと思う。

〔父の後遺症は〕右手。握手しようと思ったら、ほら、右手を出すさ。自分のイトコの子どもにも、「知念のおじいの手は、なんで、こうなってるかわかるかあ」って言って、それからハンセン病の話をした。〔父は〕いちばん上なのね、イトコのなかで。〔父は〕長男の長子だから。下に20名あまりイトコがいるんだけど、その子どもたちを集めて、よく海に連れていってた。うちのおじいおばあで。で、子どもたちにもそうやって、ハンセン病のことを教えてた。そういう前向きな人。「恥じることはないんだよ」と。「ハンセン病の子どもとして生まれてるということを、恥じちゃいけない」みたいなことを、つねづね言ってた。「お父さんはこんなふうだけど、お父さんは頑張ってるからねえ」みたいな感じ。でも、「うちは頑張れない」って、いつも言ってた、私はね。そんなに強くないもの。いまは、まあ、大人になって、いろいろなことがあって、すこし図太くなってきているけど。中学生、高校生のときに、そんなたくましい精神力で乗り切れないよお。

〔中学生、高校生になると、いじめは〕極端なのはなかったね。さっき言ったみたいに、友達の親とかおばさんとかに、遠回しにちょっと言われたり。「あの子と遊ぶな」的なのがあって、それがきっかけになって〔友達〕離れていったりというのはあった。いままで、「食べてけえ」とか言ってた人が変わるということは、もう〔原因は〕それ以外にないわけ。こっちを見るときの目。目って、すごい語るから。それでわかっていく。「今日は遅いから、ご飯食べていってねえ」とか言ってたおばさんが、「おばさーん」って言って遊びに行っても、スーっていなくなったりとかしたら、やっぱり、わかるさあね。友達はもう、「ごめんねえ」つって〔離れていく〕。ああ、もう、そういうことなんだあって。確認はしなかったよ、「なんでえ？」って。でも、それは小学校のときから経験してることだから、だいたい想像つくし。高校生になったらね、けっこう、そういうの、逆に出してたっていうか、チラチラだしたことがある、こっちから。隣近所に親しい友達が2人いたけど、この2人には話をして。いまでも、そのひとりには付き合いがある。「うちの父ちゃんと母ちゃんは南静園におったよお」「でも、この病気はね、うつらないし。風邪でうつるより、感染力は低いんだよお」とか、単純な説明なんだけど、そういうことを言えるようになってきた。お父さんの真似じゃないけど、ちょっと開き直って。

### 中学の保健体育の先生が「らい病はうつらない」という話をしてくれた

学校の先生が〔ハンセン病の話をした〕っていうのは、中学校2年か3年か、保健体育みたいな時間があるさ。体育の先生だったんだけど、彼女は。たぶん、皮膚疾患か伝染病かなにかの話になったと思う。そのときに、「らい病はね」っていう話をしてくれた先生がいて、私、すごい、それ覚えてるわけ。ドキッとしてからに。やっぱり、ほら、敏感になるんだよね。教科書とか本とかで、「らい病」とか〔出ると〕。「らい」とか言ったら、ウン、となつて、振り向いてしまうぐらい、やっぱり、敏感にはなつてた。その先生が「これはね、うつらない病気なんだよ」っていうこと、すごい説明してくれた。他の生徒（ひと）はフーンというぐらいで、べつに〔反応なし〕。〔その先生は〕多良間出身の先生だったわけ。「らい病の人と」——あの時期は“らい病”と言ってたからさ——「一緒に住んで、しゃべってもいたけど、自分はずつらなかつた」

という話をしてくれた。その女の先生、すごい厳しい先生だったんだけど、すごい好きになって、あとを付いてまわった。〔先生は私のことは〕知らなかったはず。でも、あとになって、うちのお父さんに〔この〕話をしたら、「ああ、あれは、どこの誰々の娘だよ」と言っていた。だから、もしかしたら、知ってたかもしれない。——学校で先生が授業のなかで取り上げたのは、記憶的にそれしかない。高校もない。

### 大学進学は諦めて

〔中学生のころは、将来、自分が何になりたいとかっていうことは〕なんにも考えてなかった。小学校〔のときは〕看護婦さんとか学校の先生とかになりたいと思っていた。でも、だから勉強頑張るっていうのはなかった。

高校は、宮古高校。普通科。進学コースなわけさ。そんな頭よくなかったけどさ、いちおう入れたわけ。みんなが行くから〔自分も大学へ行きたかったさ〕。〔でも、親が〕「お金がない、ない」って言ってたから、高校1年のあたりから諦めてた。

〔けっきょく、看護婦ではなく美容師の資格を取ったのは〕経済的なものがちょっと絡んでたの。美容専門学校は1年間だけだから。また、那覇にお父さんの妹がいたから、そこに居候させてもらって〔通ったわけ〕。〔それと〕うちのお母さんがさ、南静園のなかにパーマ屋さんがあって、それをやってたわけ。だから、ちいさいとき〔私の〕髪切ったりパーマかけたりしてくれたの、お母さんが。自分で巻いてパーマも当ててたし、いまでも彼女は自分でカットする。だから、美容師になりたいっていうのもあったから、その方向に〔進んだわけ〕。

### 最初の出産は未婚の状態です決断

自分、結婚する前に子どもを産んでる。最初の子が22〔歳のとき〕で、2人目が26〔歳のとき〕。

〔高校〕卒業して、〔沖縄本島の〕美容専門学校へ行って。で、〔専門学校を卒業したら〕お父さんが「〔ここで〕美容室をきなさい」って、部屋も準備してあった。南側のあそこ、〔美容室ができるように〕土間になってたの。〔お父さんが〕この家を建てたのは自分が高校卒業したときで、帰ってきたら家ができてた。——いちばん最初に住んだところは、その3畳〔2つ〕の変な家〔だったでしょ〕。「自分の家をつくるぞお」とかって、いつも、お父さん言ってたんさ。〔それで〕こっからもうちょっと南側のほう、保健所の近くなんだけど、そこに土地を借りて、トタン屋根〔の家〕を自分の力で作ったわけ、友達と一緒に。そこが初めてのマイハウス。でも、台風のときは、すごい。大雨がダダダダダダって、機関銃みたいな音で。〔その次に、この家を、お父さんが〕土地も買って、作った。

〔話を戻すと、我が家の一画を美容室にするというのは〕設計の段階からやってあったみたい。ということは、私、どこにも行くなっていうことお、と思って〔反発したさ〕。美容学校を出たら、インターンは沖縄本島か内地に行こうと思ってたわけさ。そうしたら、インターン先も〔宮古で〕決められてて。美容室も準備されてて。——やっぱり、一人立ちしたい時期さあ。なんていったらいいか、〔親元から〕離れたいとかじゃなくて。しかも、美容師の技術的には、宮古より、やっぱり沖縄とかのほうがいいって、先輩なんかからも聞い

てたから。〔ところが〕ゼーンぶセッティングされてた。

〔自立したいんだってこと〕何回も〔親に言ったよ〕。〔だけど〕上手に、また説得されるのよ、いろいろと。もう、正当な理由をつけて。〔けっきょく〕「わかった」つって、それで帰ってきて。高校のときから付き合っていた人がいて。で、美容師のインターンをやって、国家試験〔受けて〕美容師の免許を取って。そのとき、おめでたしたのがわかって。それで、自分としては、まず、お父さんとお母さんに報告して。「産みたい。絶対、産みたい」と。「だから、働けない2年間、面倒みてください」ちって、頭を下げたんだよ。——〔彼とは〕ゴチャゴチャあって、別れてたから。でも、〔子どもが生まれた〕後で結婚したよ。〔親のハンセン病のことは、彼には〕付き合ってるときから〔ちゃんと話したさ〕。やっぱり、好きな人には、自分のことをわかってもらいたいでしょ。だから、それは言ってた。

自分は、どうしても産みたかったからさ。中絶した友達（ひと）の話〔とか聞いてて、自分は〕絶対それだけはやらないと思ってたから。で、お父さんに話して、お母さんにも話して。そのときにお父さんが、「産むのはいいけど……」〔生まれてくる子どもの〕籍をどうするかちゅう話〔を始めたわけ〕。「おまえの妹か弟として〔届けてはどうか〕」つって言ったわけ。〔私は〕「違う。自分の子どもとして、自分は産みたいんだ」つって言ったわけさ。そのとき、自分としては拍子抜けだったわけ。すっごい覚悟して。もっと非難されると思ったわけ。結婚前の娘がふしだらなことをして、つて言われると思ったんだけど。まあ、そのことに対しては、ちょっと〔だけ〕お咎めがあったけどさ。子どもは産むなと言うのかなあとと思ったけど、全然それはなくて。父親がいないんだったら、子どもはどういうふうにするかっていう話から入ったから、アレっと思ったわけ。

### 証言集で墮胎の注射の失敗を知る

それ、〔父の〕証言（＝『沖縄県ハンセン病証言集 宮古南静園編』2007年）を後で〔読んで〕知ったことなんだけど、けっきょく、自分の母親が、そうやって、墮胎の注射をされて、〔その注射が〕失敗して〔私が生まれた〕つていうのもあったんだろうなあっていうのがわかった。

〔母からは、そのときのことは、まだ直接は聞いてないわけさ。〕昨日〔南静園での集まりに〕来て、〔先生たちの聞き取りの依頼に「いいよ」つて〕言ったと思ったんだけど、〔今朝になって〕やっぱり、ちょっと、心を閉ざしたなと思ったわけ。

〔お父さんから聞いてるところでは、墮胎の強制に対して〕1回目は、お父さんが「ダメ！」つって言って阻止して。2回目に、お父さんがどっかに行ってるときに、もう無理やり連れていかれて、〔墮胎の注射を〕されたつていうこと、それしか聞いてない。このあいだ、お父さんがお酒飲んでたときに、ポロッと、「もう、そろそろ、おまえの口から M ちゃんにしゃべってもいいんじゃないかあ」つてこと言ってたけどね。お母さん、「うーん」つてやってたから。ああ、まだまだだな、と思って。見た目は、飄々（ひょうひょう）としてるんだけど、すっごい、辛かったんだろうなあとと思う。自分を水納島に預けに行って、手放したときの辛さもさ。自分が子どもを産んで育ててから、その親の気持ちちつていうもの、ほんと、少しずつだけど、わかってくるようになるさ。いまさ

らながらだけど、ほんとに、いまごろ、いろいろ考える。

〔父親の証言を読んだとき、どう思ったか、ですって？〕ショックだよ。なんて言ったらいいんだろう、複雑な気持ちだったよ。ちゃんと、最初は、読めなかったよ。2回か3回目ぐらいで、通して読み終えた。〔読みかけては、本を閉じて。〕しばらくして、チラッと見て。他の方の証言もそうだよ。読めなかった。すぐ涙、ウルウルってなって。辛いつちゅうか、情景とか、そのときの思いをさ、想像したらもう、ウーンて思っ。もう無理無理、と思っ。閉じて。しばらくしたら、また見て。見たら、やっぱり、いろいろ考えるし。だから、時間かかった。先生たちの本（『ハンセン病家族たちの物語』）もさ、1回で読破はできなかつたよ。晴海さんなんかのも、さらあつて読めることじゃないさあ。読みながら、いろいろなことを考えて。また、ちょっと置いといて。

### ここ 20 数年は介護の仕事をしている

〔せっかく資格を取ったのに、美容師を〕やめた理由は、あ那时的状況としては、宮古は、時間外保育というのがなくて。〔だから〕美容師〔の仕事をしてながら自分で育てるの〕は無理。お父さんお母さんには預けられない。ましてや、相手方の〔親に預けるのも〕とんでもない話で。——〔娘が生まれてから〕結婚して籍入れたのね。——けっきょくは、子育て、自分でやるしかない。それで〔美容師は〕やめて。まあ、パートとか。子どもがちいさいときは、どうしても家にいたかつたから、メーター検針とか、集金とか、時間がとれるやつをして。〔その後も〕期間限定の仕事をしたりとか、なんでもやつた。ラーメン屋で働いたこともある。〔長くやつたのは〕昼間は保育園で働いて、夜は新聞配達してつていうかたち。保育園に勤めてるときは、子ども相手に仕事をしてたんだけど、なんかね、今度は高齢者のお世話をできたらいいなと〔思っ〕、22年くらい前に介護の〔仕事に就いた〕。〔介護の仕事は〕やり甲斐はある。でも、子どもたちのほうが、やっぱ、パワーもらえる。お年寄りの場合は、自分が疲れる。へとへとになる。

〔彼とは、けっきょく〕別居して、離婚した。20年くらい前かな、正式に籍を抜いたの。〔離婚は、両親の病気とは〕関係ない。旦那の仕事のこととか、いろんなことがあつて。

〔ただ、結婚するときには〕あつちの親に反対された。その反対は、宗教が違つていうのもあるし。年齢的に早いつていうのもあるし。しかも、あつちは長男の一人息子、私も一人娘。宮古つて、そういうのが理由で反対されるの、けっこう多いからね。〔宗教の違つて、こつちがキリスト教で、むこうは〕普通。宮古の先祖崇拜。宮古島つて、9割以上はそれだから。やっぱ、反対にあうのはしょうがない。

〔でも、いま考えると、うちの両親の病気のことも〕なきにしもあらず。それは、はっきり言われたわけじゃない。「あなたがハンセン病の子どもだから、結婚は許しません」という直接的な言葉をぶつつけられたことはない。だけど、ニュアンスはある。それは、その後の結婚生活のなかで、あそこのおばさんという人からの、ちょっとしたアレもあつて。そのなかで、あああーというのは、言葉のはしばしで、気づいた。やっぱ、そういうのもあつたんだなあつて。

### 人間として尊敬できる父、母とはまだ微妙な壁がある

〔私の2人の〕娘たちも巣立ったから、お父さんとお母さんと、いま、3人で暮らしてる。なんか、徐々に親子関係が修復ついたら変な言い方だけど、水入らずの生活してきてるから、変わってきてる。お母さんに対する思いも変わるし。

お父さんは昔から大好きだね。お父さんは、父親としてもそうだけど、一人の人間としてすごい尊敬できる。いちばん覚えてるのは、小学校6年か中学1年のころ、夕飯食べ終わって、自分たちはお茶を飲んで、お父さんはたぶん晩酌してたと思うけど。そのときに、「おれたちは親子だけど、一人の人間と一人の人間なんだよ。そういう付き合いもしないといけないんだよ」みたいなことを言われた。「一人の人間として強く生きろ」みたいなことは、いつも言っていた。だから、なにか事あるごとに、お父さんのことを思い出す。

お母さんは、南静園にいるときは〔私を〕甘やかし放題。それが、市内に来たら、「あれもダメ、これもダメ」じゃないけど、しつこくいうか、いろんなことにうるさくなってきて。〔でも〕いま考えたらね、母親はみんな、そんな細かいこと言うてくるさ。それが、小さいときは、〔私にとっては〕ただもう、うるさい母ちゃんになってしまった。

最近では、親子として仲がいいかっていえば、仲がいいほうなんだけど、どっかで壁があって。それが最近では、少しずつ取れてきてる感じがする。どっかで、自分を百パー出して寄り掛かれないっていうのがあったわけ、ちいさいときに。だから、お利口さんのMちゃんにいるっていう努力をするみたいなのが、どっかにあって。やっぱり、いちばん一緒にいたい時期に、親がいなくて。〔そのあとで〕一緒に住み始めて。どっかで〔母親に対して〕百パーセント〔出して〕いけない自分がいたわけさ。なにか違和感っていうか。自分はおばあ子で育ってるからさ。母親は、自分の子どもを〔おばあに〕預けたわけでしょ。ちょっと、そこらへんもあって、嫁姑じゃないんだけど。で、自分は、おばあの方になるわけ、なんかあったら。そしたら、〔母親のほうは〕子どもを預けたっていう負い目もあるから。だから、そのへんの関係が、父親とは違う、微妙なのがあった。なんて言ったらいいか、うまく表現できないけど。だから、いまだに、どっかで、お母さんは、私に対して、全部は出してないさ。自分もどっかで、百パー出してないっていう、変な〔とこが〕あると思う。お父さんは、見てのとおり、すごい〔心の〕大きな人だから、だれに対しても、出してるんだけど。自分と母親は、そういうところ、似てるかもしれない。表向きは、まあ、愛嬌して、ハハって笑ったりするけど、どっかで止めてる、根っこがあるような気がする。

親子の絆が強いですかって、もし聞かれたとしたら、「うん、普通」と言うと思う。もっと絆が強い家族とかもいるからさ、世の中には。それと比べちゃあいけないと思うけど。〔親子の絆って〕見た目じゃないさあね。見た目で、仲がいい親子だねえとか、みんな言うけど、やっぱり、心のつながりがどんなかあちゅうのだと思うわけ。見た目は、いくらでも装えるじゃん。仲のいいフリとか、やさしいフリとか。年を重ねていろんなことを経験してきたら、ひともやさしくなっていくし、上手に対応やっていくけど、一回、詰まったものは、なかなかさ、溶けない。どっかであるわけ、ここらへんでシコリになって残ってるような気がする。でも、それがなんなのか、自分でもわからない。けど、なんか変、っていうのがある。それは、親に対してもそうだし、自分自身

に対してもそうだし。ちいさいときに、近所の人から冷たい目〔で見られた〕。あのとき、ほんとに、父ちゃん母ちゃんに会いたい。会いたいさ、やっぱり。会いたいけど会えないちゅう、その辛さ。「次、会うときまで、Mちゃん、頑張れね」って言われた母の言葉を思い出して、また母親に会うまでの期間は辛抱強く頑張ったわけさあね。まあ、自分は早いうちに両親と一緒に住めるようになったから幸いなんだけど。でも、ちいさい、物心ついたときに受けたその痛手っていうのは、けっこう、思ったより、自分のなかで大きかったんじゃないかねえと、最近振り返って思う。ちいさいときのあの時期のことは、自分の人生のなかでは、すごい大きい時間、占めてると思う。

### 熊本判決以後、明るくなってきた母

お母さんの両親、じいちゃんばあちゃんは亡くなって。お母さんから、自分のきょうだいの話聞いたことはなかったのね。で、小学校5年か6年のときに、お母さんのお姉さんの子どもで、私と同じ年の子がいて、もう末期ガンであれだからつって、〔八重山に〕会いに行ったわけさ。そのときにはじめて、お母さんのきょうだい、お兄さんに会った。〔お母さんの家族は、もともとは宮古島にいたけど〕生活ができなくて移住していった〔つて聞いた〕。これも最近知ったことだよ。——で、その〔八重山の〕おじさんと、最近、この10年ぐらいのあいだ、けっこう行ったり来たりしてる。やっぱり、熊本の訴訟が終わってからは、お母さんも気が楽になったのかわからんけど。〔宮古島にいる〕親戚にもけっこう私も行ったり。そのときに、母方のイトコともはじめて〔会った〕。大人になってからね。

〔お母さんは〕それまでは、自分の親きょうだいのことはあんまり話さない。付き合いも〔しなかった〕。父は、けっこう、前へ出ていく人だけど、彼女は「ダメ、ダメ、ダメ」〔だった〕。で、いまがいちばん楽しいって言ってる。いままでの人生のなかで。変わってきてるもの、性格が。むかしは人前に出てこない人だった。〔昨日みたいに〕あんなふうに集まりがあるよお、つっても、「行かない」。お父さんが無理やり連れて行っても、黙あつて一言もしゃべらない。いまはもう、自分から、ああしてするし。

### 父も娘たちも応援してくれて

〔今度の裁判のことは、お父さんから聞いた。〕「〔原告に〕なれ」とは言わなかった。「こういう話があるけど、どうするか、Mちゃん？」と。「しなさい」という言い方は、いつも、彼はあんまりしない。

〔私の娘たちはいま36歳と32歳だけど〕ちいさいときから〔おじいとおばああの病気のことは教えてる。〕おじいもさ、物心ついてからだけど、「おじいの手は、こんなだよ」と、自分から言う人ではあるからなんだけど。あとは、親しくしてた〔南静園の〕おじいおばあなんかのところに、やっぱり、年に2回とか〔連れて〕行くし。「こんなに大きくなったよお」とか、「小学校入学するよお」とか、節目節目には挨拶に行ってたから。そのときに、いろんな話、娘たちにはしてる。いまの裁判のときも、「そういうことになったけど、〔原告になっても〕いい？」つったら、「もう、お母さん、やるって決めたでしょう」って言われて。〔娘たちは、家族訴訟〕応援してくれてる。今度、〔ハンセン病〕市民学会に下の子が〔くるよ〕。



〔上の娘は〕大学行って、沖縄本島で市役所勤めしてる。下の子は、沖縄本島の専門学校〔へ行ったんだけど〕、「東京へ行ってどうのこうの」って言ったとき、〔おじいとおばあは〕「なんでえ。地元で、なんか仕事はないのかあ」とか言ってたけど、やりたいことをさせないとね。若い子は行きたいのね。可能性を試したい。〔けっきょく〕東京へ行って、自分で仕事も探した。

〔父親の証言集を読んで、私が墮胎されかかったことを知ったとき、そのことを娘たちには〕すぐは、私は言わなかった。さすがにショックだったから。で、なにかあのとときに言ったと思う、最近だよ。「お母さんはさ、けっこう、ショックだったんだよ」って言ったら、「そうなあ」って言った。——自分が生まれなかったら、彼女たちふたりも生まれてこなかったわけだから。だから、すごいことではあるなと思って。すごい複雑〔な気持ち〕だった。

### 裁判にかける思い

〔あの〕証言集を見たときに、自分は何のために生まれて、何のために生きていけばいいんだろうって、思ったの。軽く人生をおくってきた自分がさ、ほんとうだったら、生まれてこなかったかもしれないのに、生まれてきたわけでしょ。じゃあ、もうちょっと、頑張って素晴らしい人生をおくればよかったかなって、そのときは、ふと思ったんだけど。でも、〔もっと早く知ってても、自分の人生〕たぶん、変わらなかったと思う。あんなもんだと思うけど。でも、すごいショックだった。だから、南静園で生まれたよっていうのは、聞いて知ってたけど、生まれるまでのあいだに、こんなことがあったちゅうのを知ったときは、やっぱり、ショックだったし、そのとき、いちばん最初に思い浮かんだのが、お母さんの顔。それと同時に、あっ、自分が子どもができたときに反対しなかった〔のは〕ああいうこと〔があったから〕だったんだあというのが、そのときに理解できたの。

たしかに、国はさ、〔墮胎で〕亡くなった人たちに碑を建てたりとか供養したりとかっていうのもやってはいるんだけど。やっぱり、人が生きるとかさ、生まれるっていうことに関して、何年か前の市民学会で〔入所者の〕おばあちゃんが、自分の子どもが生まれて、おぎゃあと〔産〕声も聞こえたのに、ピタッとやんだと。そしたら、看護婦さんから「死産でしたよ」って伝えられた、という話を聞いたことがあって。そういうふうにして亡くなってた子どもたちが何千といえるかもしれないさ。ホルマリン浸けのとかも、自分は南静園にいたとき、あすこらへんにあったちゅうのを聞いたことがあって、ちいさいときに〔見に〕行って、かなり怒られたような記憶がある。そういうのがあるから、いまの裁判はやっぱり、自分だけの問題じゃないし。たしかに〔自分も〕被害を受けて辛い思いもしたんだけど、自分だけじゃなく、他のひともいろんな経験してるさ。やっぱり、元を質していけば、国のね、間違った政策のおかげで起きたと思って。生まれてくるべきだった命も、その、前から、被害を受けてるわけでしょ。自分も、ほんとに、生まれてから〔だけ〕じゃなくって、生まれる前から被害を受けてたっていうことがあるから。そこは、やっぱり、絶対、違うよね、っていう思いはあったから。大人になって〔から〕被害を受けたひともいるだろうし、いろんなパターンがあるとは思っただけど、生まれてきたのにすぐ命を摘み取られていったというのが、やっぱり、自分のなかではすごいショックなところがあるね。

あと、元ハンセン病の患者さんたちのことは、こういう大変な思いしたよっていうの、[世の中に知られて] あるんだけど、家族のことは誰も知らないわけ。なんでかっていったら、家族はみんな隠れて生きてきたから。世の中に誰も教えてないし。わからないさ。でも、家族も、元ハンセン病の方たちとおんなしように被害を受けてきたよと、それを、やっぱり、世間というか世の中にわかってほしいし、それを記録として残していきたいし。で、その原因になったのは国の政策でしょう、と。だから、もう一回、ちゃんと調べて、自分なんかの思いをちゃんと受け止めて、謝るべきべきじゃないのというのもあるし。いくら、世の中がいま、みんなわかっていると言いながらでも、ハンセン病のこと、わからん人いるし。[宮古島は] ちっちゃい島だけど、いまだに偏見差別がまだまだ続いている現状を、やっぱり、わかってほしいというのもある。ほんとは、顔も名前も出したくないんだけど……。やっぱり、考えたよ、真剣に、いろいろ。もう、考えて、考えて、考えて。やるしかないかなと思って。弁護士先生に「顔も出しますか？」って言われたときに、たぶん、出さんといけなだろうなど。で、[2016年] 3月29日の[第二次提訴で] 記者会見をすることになったときに、[私が出なかったら] もうひとりの井土(いづち) [一徳] さん、あの方だけが記者会見の場に出ることになるから、それはちょっと悪いなあというのもあったし。でも、その前からもう、なんていうの、心づもりっていうか、気持ちはある程度 [できてたのよね]。

なんか、[私の] 父親が、やっぱり、自分のことよりも人のことを優先して、頑張ってるし。[ハンセン病になった当事者の] 裁判が終わったあとも、退所者の方とかのかかわりとか、いろいろやってきてるのを見てたら、頭さがるところがいっぱいあるから。

### 法廷での意見陳述は緊張した

[熊本地裁の] 1回目の[口頭弁論の] ときは、すごい緊張っていうか。[原田] 信子さんとか林[力] 先生の、なんていうの、やっぱり、文章でみるより、本人の声を聞いたわけでしょ。[信子さんの陳述のときは] まわりが[泣いてた]。本人も喉を詰まらせた。やっぱり、その思いを想像したらね、自分たちはこの裁判勝つために頑張っていかなきゃいけないんだあって思ったね。

[2回目の期日のときに、自分が意見陳述したんだけど] 口がスムーズじゃなかった。[口が] パクパクしてから、呂律がまわらないというか。緊張したのは確かだね。この年になって、あんな経験するとは、誰も思わないさあね。

あとは、支援してくださる人たちっていうか、いろんな方が見えていたんだけど、他人(ひと)の問題だけど、それを自分の問題として一生懸命考えてくれてさ、こうやって応援に来てくれている人なんか見たら、ああ、ありがたいねえと思う。懇親会のときも、あんまり人がいっぱいだから、名前、覚えられない。何回かお会いしてるあいだに、やっと、名前と顔が一致したね。

### 宮古の家族原告の「ティダの会」

[568名の原告のうち] 宮古は67名だったかな。[「ティダの会」の始まりは] 「裁判の[説明] 会があります。[原告の] みなさん来てください」って、弁護士先生のほうから通知が来ますよね。そうしたら、みんなが来るさ。そのときに、「家族会、宮古は宮古でつくりたいんですけど、どうですか」っていう

話をふって。——それは、お父さんからのアドバイスだったんだけど。やっぱし、弁護士先生だけが頑張るものじゃないと。——〔それで、みんなから〕オーケーもらって。「で、名前、どうしますか？」というのが、次の課題になって。次回のときに、「ティダの会」<sup>1</sup>っていうことになって。「これから、みんなに連絡したいんだけど、とりあえず、自分〔ともう一人〕を共同代表ってことにさしてもらっていいですか」ってなってる。この会は、裁判が終わったら終わりじゃなくって、〔そのあとも〕集まっていこうねっていうのも、事あるごとに言ってる。

---

**註**

<sup>1</sup> ティダは、沖縄の言葉で「太陽」の意味。

## **A Miraculous Life: An Interview with a Plaintiff of the Lawsuit of Class Action of Hansen’s Disease Patients’ Families**

Yasunori FUKUOKA & Ai KUROSAKA

The publication of Ai Kurosaka’s Japanese original version (Seori Shobo, 2015) of *Fighting Prejudice in Japan: The Families of Hansen’s Disease Patients Speak Out* (Melbourne: Trans Pacific Press, 2018) functioned as the leverage for the lawsuit of class action of Hansen’s disease patients’ families at Kumamoto District Court in February 2016.

In December 26th, 2016, at the second pleading of the trial, a female plaintiff whose number is 188 stated her opinion as follows.

“I was born in National Sanatorium Miyako Nanseien at Miyakojima Island in August 4th, 1958. To tell the truth, my mother was forced to get the abortion injection by the staff of the sanatorium when she was pregnant with me, but fortunately the injection did not work and I was able to be born to my mother.”

When we heard her statement, we immediately reminded that we are already familiar with this story from the interview with Mr. Masakatsu Chinen who once lived in Miyako Nanseien. The interview with Mr. Chinen was practiced at Nanpu Hall, the visitors’ lodge of Miyako Nanseien in February 19th, 2008. (This interview is published with the title of “Segregation Policy and Eugenic Policy: An Interview with a Former Resident of a Hansen’s Disease Sanatorium” on the same issue of this journal as well.)

This female plaintiff is surely Mr. Chinen’s daughter. (We call her Ms. M in this paper.) We visited Miyakojima Island with Mr. Gwangnam

---

Hwang, the vice representative of the plaintiffs group during May 4th and 7th, 2017. On May 4th we spent afternoon time to practice the field work in the sanatorium, and had a convivial gathering with the members of *Tida-no-Kai* (Society of Sun), that is, the group of the plaintiffs in Miyakojima, and former and current residents of the sanatorium (25 people in total). On the next day, we held an interview with Ms. M at her place.

The government of Japan, the defendant of the lawsuit stated that the Segregation Policy only targeted Hansen's disease patients themselves, thus they would not accept the claim that this policy negatively affected the patients' family lives. I wonder if the legal representatives of the government honestly agree with this statement or not. We have met several plaintiffs who could live thanks to the fact that their parents ran away from the sanatorium while they were in pregnancy. Even Ms. M is the survivor from the abortion injection that the sanatorium staff forcedly gave to her pregnant mother. Certainly, the government attempted to annihilate not only Hansen's disease patients but also their descendants through the Segregation and Extermination Policy and they just failed to achieve it perfectly. However, we should not forget there had been enormous unborn lives due to this policy. In the lawsuit of class action of Hansen's disease patients' families, many plaintiffs say that their unborn brothers and sisters were aborted by the government policy.

**Keywords:** the lawsuit of class action of Hansen's disease patients' families, Eugenic Policy, life story